



十二 春は遠からじ？

「はっ、はっ、はっ」直人は山道から勢いよく道路に飛び出した。

「キー」急ブレーキの音。

「あぶない」二人の声が重なる。

直人の目の前にはピンク色の自転車があった。そして、ヘルメットを被り、サングラスを着け、ピンク色の競技服で身をくるんだ人がいた。ヘルメットからは長い髪が出ている。胸の膨らみやふくやかな腰。女性だ。

「ごめんなさい」女性はサングラスをはずした。

可愛い。直人は一瞬、女性の顔に釘づけになった。直人と同じ高校生のように見える。そして、すぐに、

「いえ。こっちこそ、急に飛び出してきた、すみません」と、頭を下げる。

「練習ですか」彼女の方から話し掛けてきた。

「ええ。山の中を走っているんです」そのまま。気の効いたセリフが言えない。それ以上言葉が続かない。

「山道はアップダウンがあるし、石があってでこぼこしているから大変でしょう」彼女が会話をつなげてくれた。

「ええ。でも、登りはきついですけど、展望台に到着した時は達成感がありますよ。市内も見渡せるし」

「展望台？」彼女が首を傾げた。

「ええ。公園の頂上に展望台があるんです。老人ホームから尾根筋を登って、展望台をゴールとしたコースで練習しているんです」

「眺めがいいんですか？」

「そうですね」と言いかけながら、「でも、ゴールすると心臓や筋力がもたなくて、いつも座りこんでいるので、景色をじっくりと眺めたことはあまりないですね」と苦笑いする直人。

「それって、もったいないですね」彼女が微笑んだ。

「そうですね。今度からゆっくりと眺めてみます」直人もつられて笑った。

「それじゃあ」彼女はサドルにまたがると道路の坂を下っていく。直人はその後姿をじっと見送った。

「どうした。直人。何、道路の真ん中で突立っているんだ。車に轢かれるぞ」後から出発した荒木先輩が直人に追いつき、肩を叩いて道路の坂を下っていく。

「はい」直人は彼女の姿がまだ見えるかなと思い、荒木の後ろをついて走ったものの、自転車の方がスピードは速いため、彼女の姿はもう見えなくなっていた。

それから、たまにだが、自転車の彼女と会うことがあり、その度に、直人は彼女に手を振った。彼女も直人に手を振り返してくれた。

ある日のこと。頂上近くの三叉路の自動販売機の近くで彼女が自転車から下りて休んでいた。直人も展望台にゴールした後、山道を通らずに、アスファルト道を下りていた。

「展望台からの景色はよかった？」彼女は以前話をした内容を覚えてくれていた。

「もちろん。今日も最高でしたよ。瀬戸大橋は見えないけれど、瀬戸内海に夕陽が沈んでいるのが見えました。もしよかったら、すぐ近くだから、展望台に行ってみませんか？」直人は何の気もなしに誘った。

「そうね。今日は練習も終わりだし、行ってみようかしら」彼女はヘルメットを脱ぐと即座に返事した。黒い髪が目の前に現れ、揺れた。直人は一瞬、どきっとする。

直人は彼女からOKをもらおうと思っていなかったのに、休憩して落ち付いていたはずの心臓が再びドクドクと鳴りだした。普段の練習以上の動悸だ。

「こっちなんだ」冷静にふるまいながら直人は元来た道に戻る。

「じゃあ、ついていくわ」彼女は自転車にまたがると直人の横に並んだ。真近で彼女を見る。目は大きく、鼻すじが通っていた。口はやや大きめだ。肌の色は白い。それに比べて直人は真っ黒だ。

「ハードな練習をしているのに、色が白いんだね。僕とえらい違いだ」直人はおどけるようにして、自分の真っ黒な右手をハンドルを持つ彼女の左手に並べる。

「オセロみたい」彼女が笑った。そう、直人の右手が黒で、彼女の左手が白だ。少し受けた。気をよくする直人。展望台のある公園入り口に自転車を止める。

「ちょっと待って」彼女は自転車を管理事務所の柵につなぐ。

「持っていられないようにしているの」

彼女の乗っている自転車は、直人が乗っているママチャリとは違う。値段は高そうだ。

「ほら」彼女は自転車を持ちあげる。直人も待ちあげてみる。それに軽い。これじゃあ、誰にでも持っていかれてしまう。

「お待たせ。さあ、行きましょう」二人は、公園の遊歩道を登っていく。

「本当に海がきれいね」彼女が呟いた。

「そうだろ。あの島が女木島で、向こう側が男木島なんだ。少しかすんでいるけど、本当ならあっちには瀬戸大橋が見えるんだ」直人は彼女と一緒にいることに興奮してか、朝日が屋島に昇ることや瀬戸大橋に陽が沈むこと、夏祭りの花火大会では、この展望台がら多くの人が写真を撮っていることなど、自分が知っていることを全てしゃべり続ける。その場で頷く彼女。しあわせな瞬間。日ごろの練習では味わえない感情だ。その時。

「瀬戸内海の素晴らしさをよく覚えたな。これもトレイルランの練習の成果だな」と背中から低い声。聞きなれた声だ。後ろを振り返る直人。そこには荒木先輩が立っていた。

「はじめまして。荒木です。T高校の二年です」荒木先輩が彼女に握手をすかさず求めた。

「こちらこそ、はじめまして。山田です。私もT高校です。一年生です」彼女と先輩が握手をした。むっとする直人。まだ、自分でさえ手を握ったことがないのに。それに、彼女が自分と同じT高校だとは知らなかった。それも同学年だとは。それなら、全校朝礼や廊下などで会ったことがあるはずだ。全然気がつかなかった。

「へえ。同じ高校だったんだ。全然知らなかったなあ。こんな可愛い子がいるなんて、今まで損したよ」荒木先輩が直人の気持ちを代弁してくれる。直人も心の中で大きく頷いた。

「可愛くなんてないですよ。それに、みなさんがT高校生だとは知っていました」

「ええ。ホント？俺ってそんなに有名人なの？」荒木先輩は普段以上にハイテンションだ。それを見ると直人はよけいに腹が立つ。

「いえ。時々、高校の体操服で走っているのを見かけたからです」

「なんだ。残念」荒木先輩はオーバーな動作で肩をすくめた。確かに、直人たちは学校の体操服やジャージ姿で練習することもある。でも、彼女は、山田さんはいつも、自転車の競技用の服を着ているのでどこの高校なのかわからなかった。また、直人は気恥かしくて、これまで出会っても尋ねることができなかったのだ。

「それで、山田さんか。下の名前は？」

「京子です」

「京子ちゃんか。京都の京？」

「そうです」

「いい名前だな。俺は京都の大学を目指しているんだ」

「えっ、すごい。京大ですか」

「京大はちょっと無理かな。京都にある大学なら、どこでもいいんだ。京都で、御苑や鴨川、祇園や清水寺、比叡山なんかを走って巡ろうと思っているんだ。そして、天狗になるんだ。あっ、はっ、はっ、はっ」

「天狗ですか。京都なら鞍馬天狗ですね。いいですね。あたしも京都の街中を自転車で走り回りたいなってきました」

「じゃあ、麒麟だ」

「あたし、そんなに首は長くないですよ」

「伝説の動物の麒麟だよ」

「あたし、そんなにかっこよくないですよ」

「いや、京子ちゃんなら、麒麟になれるよ」

「なんだか、楽しくなりそうですね」荒木先輩の言葉に彼女は大きく頷いている。確かに、先輩と彼女の会話は楽しそうだ。自分ひとりだけ、取り残されている気がする。

「そうか。直人が一人で練習をしたがる理由は、俺に黙って、京子さんに会うためだな」

急に、荒木先輩が直人に振って来た。

「いや、そ、そんなことは、ないですよ」めちゃぶりに直人は慌てる。

「凶星だな。黒い顔が赤くなっているぞ」

「これは、坂道を登ったせいで、顔が上気しているだけです」取り繕うとすればするほど顔が熱くなる。自分で自分の顔を見られないけれど、顔のほてりからすれば、赤くなっているのだろう。

「まあ、いい。たまには、一人の練習も大切だ。周りも暗くなってきたから、京子ちゃん、そろそろ帰ろうか」夕陽が三人の影を大きく映す。ただし、その中でも、直人の影だけが小さく、薄かった。

「はい」京子ちゃんは大きな声で返事をする。

それから三人は展望台を降り、管理事務所の入り口まで着いた。

「それじゃあ、お先に失礼します」京子ちゃんは二人に手を振ると自転車で坂道を先に下りて行った。二人も京子ちゃんに手を振る。

「いい子じゃないか。お前の彼女」手を振りながら先輩が呟いた。

「彼女じゃないです。ただの知り合いです」

「おっ、それなら、俺が彼氏になろうかな」荒木先輩の言葉に直人の顔がこわばる。

「冗談だよ。冗談。さあ、帰るぞ。俺に着いて来い。今なら、京子ちゃんに追いつけるぞ」

荒木先輩が走り出した。下り坂なので、いきなりのトップスピードだ。

「ちょっと、待ってくださいよ」直人は慌てて荒木先輩の背中を追う。直人の心の中は、ひょっとしたら京子ちゃんに追いつけるかも知れないという淡い期待感と二人の会話の邪魔をした荒木先輩の影だけでも踏みつけてやれという気持ちで入り乱れていた。